

整形外科 SSI 対策—周術期感染管理の実際

菊地臣一、楠 正人 ● 編

〔評者〕山崎隆志(武蔵野赤十字病院整形外科部長)

清潔手術である整形外科では一般外科などの準清潔手術に比べ、SSI 発生頻度は圧倒的に低く、SSI が発生しても不運な出来事と思われがちである。私自身も過去に MRSA によるアウトブレイクを経験するまでそう考えていた。しかし、SSI は努力により減少させることが可能で、SSI は外科医の実力を表す、と今では考えている。東郷平八郎は運がよいので連合艦隊司令長官に任命されたとされているが、その運のよさの陰には東郷の不断の努力があったことはあまり知られていない。SSI が起こるのは運が悪いのではなく、常日頃の SSI 対策が不十分であった可能性が高いのである。

本書は整形外科 SSI の予防と治療に関して、各種ガイドラインなどの総論から具体的症例まで、幅広く網羅している欲張りな本である。脊椎、膝の項では温度板からの考察、創外固定の項では患者用パンフレットも紹介されており、非常に実地的である。

総論は SSI に精通した一般外科医が執筆している。栄養管理や術後血糖コントロールの重要性、縫合糸、手袋、ガウン、サーベランスなど普段整形外科医が気にかけていない点まで行き届いた基本的解説が詳しい。

整形外科の各領域ではその領域の専門家、SSI で苦勞した医師が執筆している。自分の専門分野を読むのもよいが、専門以外の領域を読むのも興味深い。肩では“三角巾固定による安静は避ける”など反省させられ、足関節では伸筋支帯の弁状パッチ法など好奇心をそそる。

SSI 治療においてすべての著者が述べている重要な点は早期発見であるが、これぞという決め手がないことが本書から理解できる。発熱、白血球や CRP の再上昇、創不良などの指標があるが、これらが欠如する場合もあり、多くの SSI に共通するのは疼痛のようである。早期起因菌同定にはグラム染色が勧められている。SSI が多発した場合の対処法も書かれている。多発原因は同定されていないが大いに参考になる。

本書の特長に読みやすさがある。各章の Q&A は知識の整理に役立つ。また、最新の知見はトピックスとしてまとめてあり、教科書的に確実な知識とともに最新の知識も知ることができるという工夫は読者の旺盛な知識欲を満たす。治療においてはフローチャートが各項にありわかりやすい。

“症例から学ぶ”は各著者の苦勞の結晶である。整形外科 SSI では



複数回手術や抗菌薬の副作用などと順調にいかないことも多い。このような困難を克服して外科医の実力は向上していくが、“症例から学ぶ”により、SSI に対する各著者の努力の実感を体感できる。

整形外科 SSI の発生頻度は低い、治療には難渋することが多く、患者ばかりでなく医療者にも大きなストレスとなる。整形外科手術の最も重大な合併症の一つである SSI の障害を最小限にするベストプラクティスが本書から学び得る。

B5 頁 320 2010 年
定価 8,400 円(本体 8,000 円+税 5%)
医学書院 刊